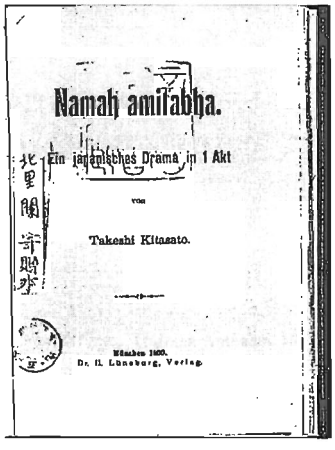
いる。

加藤と同様、緒方正規も学生のドイツ語能力が落ちて来たことに危機感を抱いているが、それは彼自身の独語修業体験からの実感であったろう。緒方は嘉永６年（1859）熊本県八代郡の生まれ。父は蘭医。早くから医学に志し、熊本藩治療所の蘭人マンスフェルトに師事した。明治４年上京、大学南校に入学しドイツ語を学んだ。次いで医学を学ぶために大学東校に入り、東京医学校を経て、明治13年東大医学部を卒業。この間予科・本科通じて殆どすべての科目をドイツ人教師に教えられた。更に明治13年から17年までドイツに官費留学している。こうした経歴から、彼は高度な独語能力の持ち主であったと判断される。彼が、明治初期ほど徹底した独語教育を受けていない明治後期の医学生の語学力に不満だったのは当然だろう。だが時代は移っていた。ドイツ人教師が、専門・予科科目の殆どすべてを独語の原書を用いて講義する時代は過ぎていた。日本の学問は進歩していた。学生の語学力が衰えたのはやむを得ない。（漱石が英語について同様なことを述べている）だが二人の建議により、尋常中学校やその後の旧制中学校に実際に独語を課すところが出てきたわけではない。それどころかドイツ語は高等学校で初めて学ぶことが定着し、旧制高校とドイツ語の密接な関係が生まれた。なお医者志望者の中には、緒方が主張したように、独協中学などにおいて早い段階からドイツ語を学んだ人も多かった。

北里闌の留学とドイツ語劇

日本人がドイツ語で学術論文を書くことは珍しくないが、文学作品を書くことは容易ではない。だが既に100年前にそれをやった人がいる。北里闌（たけし）という熊本県人で、彼は留学中に独文で戯曲を発表しドイツ文壇で話題となった。そればかりではなく、彼は古代日本語に関する論文で、ライプツィヒ大学からドクトル・フィロソフィエの学位を授与された。

北里闌は1870年（明治３）３月３日、熊本県阿蘇郡小国村北里に生まれた。私立小国小学校に学んだ後、明治16年、一家を挙げて大阪に移住、大阪府立中学校（第三高等中学校の前身）に入学した。履歴書（文部省蔵）によると、次いで明治19年京都の同志社英学校に入学、同24年６月卒業。同志社時代は英語とキリスト教を学んだ。後年提出した独文の学位請求論文に添えられた履歴書（Lebenslauf）によると、その同志社卒業後、短期間ではあるが熊本の中学校の教師を勤めた。この頃既に欧州へ留学の意志はあったが、その前に日本についても確かな知識を持っていることが必要であることを痛感し（北里『国産みの辞』）、明治26年９月国学院に入学した。ここで鎌田正夫に師事し短歌を作るようになった。さらに同28年には鎌田の推薦により高崎正風にも師事した。そして森鷗外の『めざまし草』に短歌を発表した。だが、劇作家志望の彼は詩劇というものを学


Namah amitabha.

Ein japanisches Drama in 1 Akt

von

Takeshi Kitasato.

München 1900.
Dr. H. Lüneburg, Verlag.

問的に勉強したいと思い、留学を考えた。学問するならドイツに限ると、ドイツ語のにわか勉強を始めた。だが、留学には両親が反対したため難航したが、北里柴三郎（闌は季父と呼んでいる）の仲介もあり漸く実現した。留学先は、鷗外から心理学者・審美学者リップスがいるミュンヒェン大学を薦められ、同大学に決めた。明治30年７月、仏蘭西船の中等室に乗って横浜を出発した。彼の「苦心談」（明治37年４・５号『時代思潮』）によると、荷物は五百余冊の和書と、あとは時々着て故国を偲ぶために春夏秋冬の和服を揃えただけで、そのほかには何も持っていなかったという。そして船中では、過大な経費に使って留学しても、それだけの成果が挙げられるのかと煩悶している。彼の場合官費ではなく私費留学だったので、資金集めに苦労があった。マルセーユに着いてそこからリヨンに向かい、そこで同行の二人と分かれバイエルンの州都ミュンヒェンに向かった。途中スイスの美しい景色は目に入らなかったと語っている。彼の履歴書の明治30年９月の項に「独逸文学研究ノ為独逸連邦バイエルン王国ミュンヘン大学ニ入学」とある。

だが、最初は講義のドイツ語が聞き取れずに悩んだ。それで初め小学教員の古手に個人教授を受けたが、これは日常会話の稽古ぐらいのことで、これではいけないと次にミュンヒェン大学の文科の助教授に頼んで、留学生としては高額な授業料を払って個人授業を受けた。北里はこの助教授の名前を挙げていないが、私講師のヴェルナー（Dr. R. Woerner）のことではあるまいか。この人は厳格な人であったようだ。



Im Jahr 1899 in München studierende Japaner

1899年ミュンヒェンの日本人留学生後列右から３人目 北里闌

「その先生は我々如き外国人が独逸語を十分に会得することは到底不可能だろう。本気でやる気ならば、先づ英語を忘れよ、次に出来るならば日本語を忘れて、独逸語で無くては自分の意志を発表する機関は無いと思って独逸語に突入するならば知らぬこと、然うで無ければ到底無益だ。それでも遣る気かと宣告せられた。

これは同志社で英語を学んだ時の経緯に照らして見ても全く然うに相違ないと二、三日大いに熟考の上、ここで足踏みをし、後ずさりしたならば一生の物笑ひとなるばかりだと、大いに自分を叱咤し、必ず遣って御目にかけますと、其先生にも誓って勉強した。この一念の苦役は実に悲惨なものであった。」（『国産みの辞』）

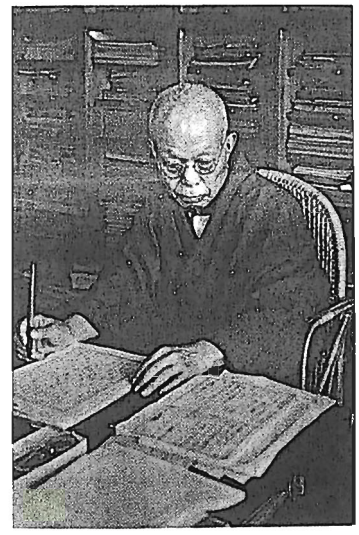
ハングリー精神の旺盛な彼らしいエピソードだ。その甲斐あって次第に講義も解るようになり、気持も落ち着いてきた。ミュンヒェン大学には２年間４学期間学んだ。同大学の文書館に保管されている目録によると、1897年から98年に至る冬学期には、ヘルマン・パウル教授の中世独逸文学史、ムンケル教授のファウスト伝説とファウスト文学の歴史、ヴェルナー私講師のシェークスピア・マクベスを聴講し、98年の夏学期にはムンケルの独逸文学史、ヴェルナーのバイロン卿、ボリンスキーのゲーテとシラーに関する講義の外、フルトヴェングラーの考古学の講義をそれぞれ聴いている。98年から99年に至る冬学期にはムンケルの独逸文学史、リヒャ

ルト・ワーグナーに関する講義、それに鷗外に勧められたリップスの審美学、シック教授のシェークスピア、ヴェルナー講師のドイツ演劇論を聴講し、最後の学期には引き続きシックのシェークスピアの外、中国語文法、19世紀英国文学を受講した。だが、彼は講義のことは何も語っていない。

友人に誘われて北里は大学内の劇詩研究会に入会した。これは学生が集まって新刊の劇作を評論しあったり、教師を招いて意見を聞いたりする会であった。さらにその頃ガングホーファーを会長とするミュンヒェン文学会が創設され、北里も教授の紹介で入会した。ある時この会で日本の大名を扱った テオドール・ ヴォルフ作『誰も知らない』(Nienand weis es) が上演された。北里はそれを観て、日本人を歪曲して描いていると思い、癪に障ったので独文で一幕物の日本劇『南無阿弥陀仏』(Namah amitabba, 1899) を書いて自費出版した。「日本人は決して外国のみに感化を受けて居るものではない。日本人は古来其開化の種は養って居るものであると云ふ事を少しなりとも西洋人に見せたいつもりで」(「苦心談」) 書いたのである。男女の心中事件を題材にしながら仏教思想を伝えた30頁足らずのものであったが、ベルリン日刊紙の記者で鋭い批評家として知られていたフリッツ・マウトナーが、日本古来の宗教観が見えるとして好意的に書いた。そのため各地に反響を呼んだ。

北里は第二作として家庭劇『フミオ』(Fumio, 1900) を書いた。これはライプツィヒに移ってから発表した。ライプツィヒ大学に入学の手続きをしたのは1899年 (明治32) 9月18日である。ライプツィヒに決めたのは「少しく尻の暖りかけたた南欧を離れ、北独の冷烈な空気に触れて、心機一転」したかったのに加え、同地が学問の都、音楽の都であり、またゲーテ、シラー、レッシングに因縁が深いからでもあるが、さらに「大学に世界的の心理学哲学者ヴント教授が居られ、審美学には南のリップスと対峙するフォルケルト教授あり、言語学の方にも大家が揃って居られる。その上支那及び日本語などの講座を持って居られるコンラーヂー教授も居られるので、各方面に渉って比較研究するには此上も無い好適地」(『国産みの辞』であると思ったからである。事実、同大学の文書館の資料によると、彼はこれらの教授達の講義を受けている。ほかにも音声学者として著名なジーフェルス、ドイツ演劇史家キョステル、文学史家ヴィトコスキーなどの講義も聴いた。だが北里は自分が受けた大学の講義について何も語っていないところを見ると、彼の頭を占めていたのはむしろ独文戯曲と学位論文のことではなかったか。その独文戯曲『フミオ』は新旧思想の対立、日本におけるキリスト教と仏教の関係を扱った現代劇で、前作より複雑な筋となっている。だが、本筋とは関係のない些事が細々と描かれているので、プロットがぼやけて見える。それが劇的構成の上で弱点となった。アウグスト・ゴットハルトはこの作品について次のように評した。『フミオ』はドイツの観客には『南無阿弥陀仏』ほど受けないだろう。そこに描かれているのは日本特有の事情であり、ドイツ人がそれを正しく理解するには、先ず日本の古い道徳的規範を勉強しないといけない。というのは、まさしく古い道徳律こそが作中の人物の行動を説明してくれるものであって、その知識がなければ、多くが誤って受け取られるであろう、と。こう述べてゴットハルトは『フミオ』を劇としては評価しないが、この作品には近代日本の生活様式と日本家屋の内部が細かく描かれているので、民俗学的には興味があると言っている。この劇をベルリンのルイーゼン劇場で上演しようという話が持ち上がり、北里は打ち合わせのためにベルリンまで出かけた。当時のベルリンの『東

亜』(Ost-Asien) 誌には上演予定の広告が出ている。だが採算が取れそうもないということで上演の話は結局、立ち消えになった。


書斎に於ける北里閑

その頃ゲルハルト・ハウプトマンが自分の近著に写真を添えて、北里に招待状を出したが、長期滞在ににによって経済的に困窮し、その招待に応じられなかったという。だがとにかく、ドイツ人のためにドイツ語で戯曲を書くことは極めて困難であると思ったが、自分の研究のため、また将来劇作で一仕事したいと思い、その経験を積むために、もう一つ書いてみる気になって、題材に佐倉宗吾の事蹟を選んだ。宗吾は農民の代表なので農民の生活を知らなければ書けないと思い、その頃懇意にしていた或る大学教授の紹介状を得て、ライプツィヒ郊外メッケルン地区の農家に住み込んでその実際を見るようにした。

「…所が初めて日本人の顔を見た所抔(など)へ行ったものですから、犬か猫乃至東洋の熊が来たかと思はれるなどして、非常な侮辱を受けて、其家には居堪らずして他の百姓の家へ行って、比較的厚遇せられて、幾分か研究する所もあったが、其中に留学の資金は全く無くなり、遂に憫れな境遇に陥って自分の携へ来った参考書を売飛ばして、それで食ふと云ふ果敢ない境遇を経て佐倉宗吾を書き了った。」(「苦心談」)

そうした苦労をして書き上げたのが『佐倉宗吾』(Sakura Sogo, 1901) であるが、佐倉義民伝をどういう風に語ったらドイツ人を納得させられるかと苦心した。前の2作に較べずっと規模の大きいものだった。今度も概して好評だった。こんな力強い作品はドイツにもないと言って感心した。当時文部省留学生としてライプツィヒに滞在中の藤代禎輔からその本を贈られた劇作家のエルンスト・フォン・ヴィルデンブルッフは、「大変面白く出来てる。少し服装を変へたら、独逸の舞台に上演することが出来よう。幸ひワイマアルの劇場監督ヴィニオウ氏と懇意だから折りがあったら推薦して置かう。君の友人の脚本がゲーテ、シルレルの作と同じ舞台に上ることになったら大に愉快だ」という返事を寄越した(藤代『鵞筆余滴』)。藤代はそのことを既に帰国していた北里に書き送って、興行権の所在を問い合わせたが、登場人物が多くて経費が掛かり過ぎるとの理由で中止になり、北里をがっかりさせた。

彼はまた留学中、1900年(明治33年) 7月、「日本古代文字解説」と題する論文によりライプツィヒ大学よりドクトル・フィロソフィエの学位を授与された。いわゆる神代文字の存否の問題を扱った研究で、北里は種々論拠をあげて結論的にそれを否定した。伴信友も神代文字の存在を否定したので、北里が勿論最初ではないが、独語を用いて西洋の学界に、議論を整理し、自説を述べて紹介したのが評価されたのである。これは後年彼が古代日本語研究に没頭するきっかけとなった。帰りは英国で建造された軍艦三笠に便乗し、明治35年5月18日帰国した。

帰国後は学習院次いで大阪府立高等医学校でドイツ語教授を勤めた。一時は劇作家を志したこともあったが(明治36年春陽堂刊行『こゝろ』はその代表作)、その後は主に古代日本語の研究に没頭した。1960年(昭和35) 5月22日、90才で大阪において亡くなった。